

2016 年生涯学習開発財団シンポジウム

多元的共生社会における生涯学習を考えるシリーズ第12回

多元的共生をめざす社会を支えるコミュニティワーク

講演：武田信子氏

武蔵大学人文学部教授 臨床心理士 東京大学大学院教育学研究科博士課程修了／元トロント大学及びアムステルダム自由大学客員教授

日時：2016年12月4日（日）14:00～16:30（受付開始 14:00～）

場所：東京大学福武ホール

第1部：多元的共生社会のイメージを持つ

■多元的共生について考える、その前に。

今日は講義というより、グループワークを交えながら一緒に考える時間としていきたいと思います。まずは、ここからはじめましょう。

◎Hello!

2000年にトロント大学客員教授として着任したとき、大学の廊下で「Hello!」と笑顔で挨拶をしたら、「あなたはHelloが言える。英語が使えるのね」と褒められました。カナダは、基本的にいろいろな土地からの移民が運営している国。まずは「Hello!」と「笑顔」で、敵ではないことを表現することが大切なんです。今日も多元的共生を考えるにあたって、まずは、お互いに敵ではありませんということを表現する「笑顔」の練習をしたいと思います。

（笑顔トレーニング）

◎ワーク：袖触れ合うも多生の縁

出身が同じ都道府県の人が、ふたり以上いない形で5人グループをつくってください。5人になったところから、座ってください。

（5人ずつのグループになる）

よろしいでしょうか。先に座っている方たち、ホッとなさってましたよね。あとの人は焦ってました。これが、南北問題です。先に座って幸せになった人のなかには、グループになった5人だけに意識が向かっていた人もいたのではないのでしょうか。この「困っている人がいるということが頭から消え去っている」状態が、日常的に悪気なく起きているということに気づいていただけたらと思います。

◎ワーク：ふるさと自慢

では、グループのなかで一番中指が長い人から1人1分間、時計回りで、「ふるさと自慢」をしてください。

(グループでふるさと自慢)

グループワークをリフレクションしましょう。自分はどうふるまっていましたか？ 何を考えていましたか？ どう感じていましたか？ どうしたいと思っていましたか？ 気が合って「LINE でつながろう」と思えた人もいたと思いますし、「ここだけの関係ね」という人もいたと思います。

カール・ロジャース博士が心理カウンセリングの3原則として、「無条件の肯定的配慮(受容)」、「共感的理解」、「自己一致」を挙げています。受容とはただ「この人はそう考えるんだ」と受け入れればよいということ。人を尊重するというのは、それでいいんです。それから「感じる」と「考える」が混同されがちということも伝えておきます。頭で良いと思っけていても、胸のあたりがむかむかしているということとはよくあること。ここでは頭で考えるのではなく、胸のあたりで感じることを大切にしてください。

■多元的共生社会とは？

さて、ここからは「多元的共生社会とは？」ということ、一緒に考えていきましょう。

◎Diversity and Inclusion?

「多文化共生」を意味する英語の定訳はありますが、「多元的共生社会」はありません。日本的な造語かと思ひます。もっとも近いのは「Diversity and Inclusion」でしょうか。私がこの言葉の意味を考えたときに浮かんできたのは、以下のようなことでした。

---様々な価値観、背景、特徴、文化、歴史を持った多様多彩な人々が、包摂され、ともに生きている社会のこと。

調べたところ、ほかの表現もあります。

・障害者・高齢者・子ども・女性(妊婦)・被災者・貧困者など、社会的排除に遭いやすいカテゴリーの人々を社会の多様性の一部と捉えるインクルーシブな地域社会…『多元的共生社会の構想』菅沼隆也著
・様々な国籍・文化・社会的立場や階層の人々が交錯するコミュニティ…多文化共生社会におけるコミュニケーション力 第一回シンポジウムチラシ

ご自身でも調べて、自らの言葉で考えてみてください。

◎ワーク：多元的共生社会のイメージって？

どろどろに溶けあう「るつぼ」、それぞれの原型はとどめたままの「サラダボウル」、とくにオランダあたりの“来てもいいよ”というような「寛容」、雑多なものが共生している感じの日本語「まぜこぜ」…皆さんそれぞれが持つのは、どんなイメージでしょうか。話をしてみてください。

(グループ内で話し合う)

今の段階で出てきた言葉を自分で持っておきましょう。今日帰るとき、2、3日経ったときでは変わって

いると思います。自分がどういうところで生きていきたいか。どんなイメージで多元的共生社会をめざしていきたいと思うのか。日本の一員として考え続けてください。

◎ワーク：隣の家外国人が来たらどう思いますか？

隣の家外国人が来たらどう思いますか？ 胸の中はどんな感じになりますか？ ワクワクしますか？ 不安になりますか？ 外国人といっても、中国人もカメルーン人もフランス人もいます。アゼルバイジャン、メキシコ、スペイン、ロシア…みなさんの胸の中はどう動いていきますか？ 話し合ってみてください。良い悪いではなく、どんな感覚を持つ自分がいるのかをシェアしてください。意識してほしいのは、フェルトセンス（身体に感じられた感覚）を大切にすること。もちろん、話し合いに際して、どこまで正直になるかも自身の選択です。

（グループで話し合う）

◎ワーク：バルタン星人がやってきました

今度は、あなたたちの地域にバルタン星人がやってきました。それぞれのグループは、地球防衛軍です。地球の平和を守るためにどうすればよいか、グループで話し合ってください。緊急事態なので、これ以上の情報はありません。ひどいですか？ だって緊急ですから（笑）。ただし、バルタン星人についてよく知っている人は黙っててください（笑）

（グループで話し合う）

どんな話が出ましたか？「逃げる」「VサインでHello!」「大宴会を開いて観察する」「足湯でリラックスしてもらおう」。「じゃんけんをする」というのもよくありますが…やはり出ましたか（笑）

さて、バルタン星人の話をしていきます。バルタン星人は、高度な知能を備えた異星人です。バルタン星が核実験で壊滅したとき、たまたま宇宙船で旅行中だったバルタン星人が難民となり、地球へやってきます。侵略が目的ではありませんでした。人間も快く迎えようとしますが、その数が20億3000万人と聞くと態度が変わる。そこからバルタン星人の地球侵略が始まり、ウルトラマンが3分間で撃退するというストーリーです。

見方を変えましょう。原発で苦しんで逃げてきた人を、相手の立場も、正義の意味も考えずに排除するというストーリーともとれるのです。今日は福島からいらしている方もいて、きついワークですが、あえてやっています。福島から来た方に「賠償金で遊んでる」「住民票を移してないだろ」などと言って、排他的になるということが、今、私たちの社会で実際に起きています。

バルタン星人は、言葉が違う言語障害者、私たちと体が違う身体障害者と捉えることもできます。「知らない」から「怖い」「襲ってくる」と思うのは普通の反応だろうとも思いますが、それだけで排他的になるということが起きていないでしょうか。そこでは、多元的共生という考え方は意識されていたでしょうか。

◎対応が分かれる、シリア難民の受け入れ

シリアからの難民を、日本は何人受け入れているかご存知ですか？ 答えは3人。2017年から5年間で150人受け入れる予定ですが、あくまでも留学生としてです。私たちは持っている人たちです。それでも、分け与えることは難しい。理想は言えますが、現実はどうか。仲良くしましょう、分け与えましょう、理解し合おうと言いますが、税金や経済的負担、治安、宗教、習慣、言語の現実に直面した時、私たちはどうするのでしょうか。

一方、カナダは、シリア難民2万5000人の受け入れを行いました。トルドー首相は移民受け入れに際し、人口増加は労働力の増加を意味し、彼らは優秀な人材であって、多様性も進むと歓迎しました。トルドー首相は言います。「10歳のときにアフガン難民だった女の子が、今、大臣になっている。今、10歳のシリアの子供がのちにこの素晴らしい国を支え運営する内閣の一員になっているかもしれない」「難民を歓迎しているだけでなく、新しいカナダ人を歓迎しているのだ」と。

◎世界から集まるカナディアン

なぜカナダは、2万5000人もシリア難民を迎えることができるのでしょうか。その答えのひとつが、「Long Road to Canada」という小学校の教材に表れています。2015年11月のパリのテロのあとにつくられた、小学校6年生向けの社会科資料です。

そこには、以下のようなことが含まれています。

- ・シリア難民受け入れを公約したトルドー首相の当選、一方で、パリのテロを起こした偽装難民という存在の事実。
- ・家や学校、言葉や仕事のサポートはもちろん、誰から受け入れるかといったシリア難民受け入れの実際の状況。
- ・700億というコスト、治安への不安等で、意見は二分されているということ。

こうした事実を踏まえたうえで、「あなたの考えをまとめよう」と、以下のような問いが並びます。

- ・5W1Hで整理して考え、あなたの賛否を決め、その理由を書いてみよう
- ・自分の地域について調べ、あなたのできることを考えよう
- ・差別主義者たちに対し、政府、警察、あなたのような市民はどのように効果的に対応できるか説明しよう

パリのテロについても同様です。テロの事実だけでなく、ISの生まれた背景、世界の反応、宗教観や地理も深く学んだ上で、どう対応すべきかを考える。これが社会科の授業なのです。こうした授業を受けている子供たち自身も、もとをただせば移民の子供たち。さまざまな国から来た彼ら自身が、次に来る人をどうウエルカムするかを学ぶのです。

ほかにも、Diversity and Inclusion教育として、「大人の理不尽な行為に対してどう対応するか」、「移民の子供が成長する小説でレポート作成、報告をする」といった授業も行われています。

◎Celebrate Diversity?

さて、あなた自身はどこまでシェアができるでしょうか。バルタン星人が来たら？ ペリーが来航したら？ 泣いた赤鬼が村に来たら？ 福島から被災者が来たら、自分の家に受け入れますか？ ひとりなら受け入れる？ 3人だったら？ 1年の期間だったら？ ホームレスが来たらどう？ シングル家庭が保育園に優先的に入れるとしたら？ 給料は減るけど時間が増える、ワークシェアの選択をすることが、あなたはできますか？

私の講演は中途半端だと思われると思いますが、もやもやして帰ってください。そして、周りの人と話をしてみてくださいと思います。

第2部：実践コミュニティワークの概念を知る

■実践コミュニティワークの概念

ここからはコミュニティワークの概念の話をしませんが、さらっとご紹介をするにとどめます。詳しくは『地域が変わる社会が変わる 実践コミュニティワーク』（ビル・リー著 学文社）の第1章から第3章をお読みいただければと思います。

◎背景にある社会構造

同じ仕事、同じ報酬とはならないことはご存知の通りです。「権力は不平等に分配されている」「利益にアクセスする機会も不平等に割り当てられている」ということ。そこには「不利益を受けている人は、自分の人生を自分で決定する力や能力が弱くなる」という構造的な問題があります。こうした人の側に立つのが、コミュニティワーカーです。

エンパワメント、ディスエンパワメントという言葉もご紹介しておきます。エンパワメントは「力づける」、ディスエンパワメントは「力を抜かれる」という意味。ディスエンパワメントされた人、つまり無力化されてしまった人は、自身で判断することに臆病になります。彼らはケアされ、守られなければなりません。これは構造的な問題なのです。構造的な立場では、人の行動は、すべて階級や人種や性などの構造的な問題に端緒を發していると考えます。個人の行動ではなく、社会的な行動と捉えるということです。

自己効力感とは「自分の周りの環境に対して影響を及ぼす能力を持っていると感じ、その結果、自分の欲求を満たすことができるという感覚」です。この「…できる」という実感が欠如すると、つまり、自分は無力だと思えば、人は動けなくなります。不安・不満がたまり、暴力行為や自己破壊的態度へとつながっていきます。

あなたが選挙で1票を投じるとき、政治を変えられると思っていますか？ 日本人の何人がそう本当に思っているのでしょうか。例えば、自身の住む市の高齢者問題を、市民として変えていけると思っていますか？

か? 「できない」と思ってしまうと、無力感や不安感がつのり、果ては被害者意識へとつながります。そうすると、自身のニーズの充足のみに意識が向かうようになります。

◎組織化によって、人は主体となれる

「自由を手にするためには、活動的で責任を持つこと」が必要です。不利な立場にある人々をつないで組織化する、一つのまとまりとすることで、彼らは力を発揮できるようになります。例えば学校のいじめ問題もそうです。「いじめはなくなる、次は自分がいじめられるかもしれない」と思っている子供たちの声を丁寧に聞いて、その子たちを10人、20人、50人のまとまりにして、みんなで校長先生に「ぼくたちはこう思うんだ」と言う方法があるのだということを大人として教えているのでしょうか。

一人ひとりを集めて組織化することで、力を得ることができます。貧しい人、障害がある人、女性、子供、権力を持ちえない人が、まとまることで力を持つことができます。社会的弱者と言われる人たちに力を得る方法を伝えて、バックから支えるのがコミュニティワーカーの仕事です。

◎コミュニティを組織化する実践へのアプローチ

社会計画は自分たちではない“誰か”が決めるものです。例えば、市長が有識者たちとプランニングするのが社会計画（ソーシャルプランニング）。一方の社会的活動（ソーシャルアクション）は、主体となる人々がコミュニティを開発、社会的活動をすることを意味します。当事者たちが主体的に取り組めるように、第三者であるコミュニティワーカーがどう動けばいいのか、といったことも含め、概念的なところの詳細は本を読んでいただければと思います。

第3部：コミュニティワーカーの仕事と役割を知る

■カナダにおけるコミュニティワーカーの事例

ここからはコミュニティワーカーの実際の仕事をご紹介します。まずはカナダ・トロントの事例から。

◎WOODGREEN

高齢者施策を考えるにあたって、市長が WOODGREEN という民間組織に調査を依頼しました。調査をするのは移民難民の人たちです。彼らの中にはかなりの学位や技術のある人がいますから、そういう人たちを雇用して、高齢者の家を1件、1件まわって調査をしてもらうのです。移民難民で来た人が、高齢者の家を1件1件まわるのには多くのメリットがあります。知り合いができ、地域のことを知ることができ、高齢者からいろいろな話を聞くこともできます。仕事としてお金も得ながら、大規模調査の結果を分析、まとめていきます。報告書を市に提出することで、その後の有識者会議にも呼ばれて提言をし、実際の施策となっていく。これが、山ほどある WOODGREEN の活動のひとつです。

◎Kids Help Phone

子供を対象とした、日本でいう「命の電話」です。利用者は無料ですが、寄付のみで運営。相当にトレーニングされたプロとスーパーヴァイザーが電話対応を行っています。なぜなら、子供たちの話を聞くのは高度な技術が必要で、ボランティアでできることではないからだそうです。子供たちの声を聴き、彼らを助けるための計画を立てています。

◎Office of the Provincial Advocate for Children and Youth

アーヴィンは若者たちの声を聴いているアドボケートです。オンタリオ州の若者の言葉を聴くリスニングツアーを行い、書き留めた言葉を政府に届けています。若者たち自身が声をまとめて出版するよう働きかけて、若者の言葉が埋もれてしまうリスクを回避しています。明日を担う子供ではなく、今、ここにいる人間として話を聴く。「愛は法律では強制できないけれども、愛される環境づくりのための法律はつくることができる」と、常に子供、若者の側に立っています。

重要なのは、「物事は当事者からはじまる」ということ。ワーキンググループを組むときは、当事者を他メンバーより必ず一人以上多くするといいます。いかに当事者に「自分の人生を自分のものに」という感覚を持ってもらうかが重要だからです。虐待や貧困に苦しむ若者の声を、政治家が黙って聴くという会議も開催します。どこかの誰かではなく、目の前の当事者の声を聴いた政治家は「虐待、貧困とはどういうことか、知らなかった」と言うのだそうです。そこで、「そうですよね、知らなかったですよね。でも今知りました。さあ、どうしますか？」というアプローチをしていきます。

◎リージェント・パーク団地の再開発

2000年に私がリージェント・パークを訪れたとき、そこは典型的な貧困地域でした。当時、ドラッグ漬けになっているような若者の側に立って活動しているユースワーカーに会いにいったのです。それから15年。改めて訪れると、街が変わっていました。市と州と国がお金を出し合い、いったん住人を全員退去させて、街をつくり替えたのだそうです。スポーツセンターやショッピングセンターを整備し、理解のある中流階級に「寄付をするかわりに、ここに住まないか。住むことで街が変わるから」と声をかけました。それから、出ていった人をもとの場所ではなく、組み替えて戻しました。

同時に学校内に、0歳からの子供の居場所をつくりました。違う文化を持った移民難民に、親も含めて、カナダがどういう国かを知ってもらうためです。学校に来てもらうための、おやつ代や交通費は企業に支援を依頼。移民難民が、多元的共生社会としてのカナダを好きになり、カナディアンとしてこの国で生き直すんだと思えるようにしていくのです。こうした試みは成功し、街も、学校も、生徒たちも変わりました。

■身近な日本における活動事例

日本の抱える問題と、日本のコミュニティワークにも少し目を向けてみましょう。

◎社会問題の根本的な原因の分析

子育て不安、うつ・自殺、過労、格差・貧困、養育力の低下…多種多様な問題が日本では顕在化していて、

一つひとつに対処してはいても、なかなか問題が消え去らないという状況が続いています。その問題がどうして継続しているのかと考えると、すでに根が生えているということがあるのです。多元的共生社会の土壌がないところに、外の施策だけを真似しても、子育ては楽にはなりません。歴史的な社会の価値観をどう変えていくかが大事であって、そこは、みんなで考えるしかないのです。

海外からの移民の問題については、今はまだ身近に感じるには距離があるのかなとも思います。ただ、先ほどのワークで感じていただいたように、実際は身の回りに起きているようなことであり、どれだけ応用問題として考えられるかということなのだと思います。

◎品川宿・忍者修行の旅、こども食堂、日本コミュニティ七輪学会

身近なコミュニティワークの例を紹介していきます。そのひとつが「品川宿・忍者修行の旅」です。品川の商店街を巡りながら、大人忍者と子供忍者が一緒になって、修行をするというもの。こうした街づくりの活動は、あちこちで行われています。

少子化は、ひとつの家のなかで考えるから問題になるのであって、家の外に出てみようという試みをしている方もいます。「1人でご飯食べるのなら、10人集まって食べればいい」というのが、貧困対策でも注目される「こども食堂」の発想ですね。

「日本コミュニティ七輪学会」という活動もあります。家の前で七輪を出して、何かを焼いていると、子供が寄ってきて、おじいちゃんおばあちゃんが来て、仕事帰りのサラリーマンが寄ってと、自然とコミュニティが生まれます。活動するお金がない、場所がないというのではなく、家の前の道路でいいんです。そこからはじめてみませんか？

■さいごに

みなさん、今日はどちらの県からいらっしゃいましたか？ それぞれの土地に、それぞれの土地ならではの「おはようございます」があります。「おはよー」「はやえなっす」「いあんばいです」「おはよーがんす」「っうきみそーちー」…これに、「Hello」が加わり、「Bonjour」が加わり、さらには高齢者でも、障害者でも、貧困家庭であろうとウエルカムと言えるように、シェアリングする心をどう持てるのか。そんな心を持てる子供たちを育てるために、私たち自身が何を学んでいかなければならないのか。みなさんが、今日学んだことを持ち帰って、次へとつなげていってください。今日ここにいる100人が、5人に話していただくだけで、広がっていくんです。

コミュニティワークの話は駆け足でしたので、本を読んでいただければと思います。今日はとくに具体的な実践例をお話しました。では、さいごに。せっかくグループになっているので、もう一度5人で話をして終了としましょう。

(グループで話し合う)

【質疑応答】

男性：七輪の活動を東京で実際にやったら、こわがられるんじゃないかと思いました。どう安心感を得ているのですか。

武田教授：今日は日本七輪党の党首と事務局長が来ているので（笑）、党首の武澤さん、お願いします。

武澤さん：コミュニティ七輪というのは、全然たいしたことはないんです。ただ、うちに七輪があったので、家の前を出してただけのこと。子供たちがわんさかきて、不登校の子がきたり、シングルの人がきたり。私は別に何もしていないんですけど、いつの間にコミュニティができていたんです。すごいことをしようというのではなくて、七輪を出してみる、くらいのことなんです。それだけで、子供は寄ってきてくれますよ。

武田教授：たき火はむずかしいですけど、七輪は大丈夫です。ちょっとやってみてください。水を用意するくらいで大丈夫です。

男性：バルタン星人のワークで、バルタン星人の事情は分かったんですが、ただ粗暴な敵の場合もあるんじゃないかと。害を持っているだけの人が来てしまうケースですね。そのリスクにどう対処したらいいのか、そこが自分のなかで割り切れなくて。実際どうお考えですか。

武田教授：「みなさん、どうですか？」と聞きたいですね。一人で考えるのではなく、粗暴であることをみんなが知って、その人の立場も知り、どうしたらいいかをみんなで考える、ということなのではないかと思います。私は、まったくなんの理由もなく粗暴になるという人はいないと信じています。例えば、移民の犯罪率といったことも話題になりますが、「怖い」「何かされそう」と思われた相手が、実際にそうするんです。私たちの目が、彼らを犯罪者に仕立ててているということ。ですから、今から変えていきませんか。ボトムアップで、みんなで考えて。それがコミュニティワークなんです。

男性：その“みんな”のなかに、商店街の頑固なおじいちゃんの姿が浮かんだんですが、そういう人も“みんな”の対象なんですよね。

武田教授：ええ。実際、そういう方がいるワークを何回かやったことがあります。その人を尊重しながらワークを進めていくと、「自分よりその辺のおばちゃんのほうが、詳しいことがある」ということが分かってくるんです。かなりお年を召した方でしたけれど、その場で変わっていかれました。人は変わるということ、どこまで信じられるかということだと思います。簡単ではありませんが、その技を身に着けているのがコミュニティワーカーです。もちろん勉強が必要ですよ。実際、カナダでも、本当にすごいコミュニティワーカーは、2、3人だと聞きました。今日はその触りだけをご紹介します感じですよ。

<参考文献>

『地域が変わる社会が変わる 実践コミュニティワーク』ビル・リー（著） 学文社

『地域が変わる社会が変わる 実践コミュニティワーカーエクササイズ集』ビル・リー（著）学文社

『教員のためのリフレクション・ワークブックー往還する理論と実践』武田 信子（著・編集）学事出版